

概要報告

実施期日	7月29日(火)【午前】
部会名	小学校 道徳部会

テーマ 『一人ひとりの心に響く道徳の授業をめざして』 ～子どもの姿から学ぶ～

提案概要

今までは、「子どもたちにこうなってほしい」という教師の願いからテーマを決め、それに沿って教材を選び、クラスの子ども全員がその価値を習得するような教師主体の道徳授業をよしとしてきた。しかし、ある授業の協議会で、「もっと子どもの思いに寄り添った授業ができたのではないか。」と、同僚教師に指摘されたことを受け、「子どもの心を揺さぶり、子どもの心に葛藤を引き起こすような、一人ひとりの心に響く道徳の授業を目指したい。」と考え、行った道徳の授業の実践報告である。

2学年児童に対して行った3つの授業の実践について、それぞれ実践報告と振り返りを行った。

<主な成果>

- ・子どもの姿を中心にして授業を振り返ることができるようになり、本音でぶつかってくる子、迷っている子、悩んでいる子の思いをきちんと受けとめ、一人ひとりの子どもと共に考え、悩み、感じる教師の心と身体が大切であると気付くことができた。
- ・教師主導の授業スタイルを変えたことにより、子どもたちから多様な考えを引き出すことができた。
- ・同僚の先生方と授業を見合い、学びあう校内研究体制の有効性が見られた。

<主な課題>

- ・子どもの考えを引き出すための、教師の細やかな配慮（魅力的な教材、座席の工夫、分かりやすく考えが深まるような発問等）について、体系的に研究していく必要がある。
- ・多様な状況の中で、子どもの姿をより丁寧に見取っていくための指導力の向上が必要である。

質疑概要

それぞれの授業の実践について、「ねらい」に迫ることができたか、という質疑があった。本来の意図とは違う部分がクローズアップされ、ねらいに迫りきれないところもあった。しかしその反省を、その後の授業で生かすことができた。

また、授業中に話し合い活動をしたりワークシートを書いたりする時間があったかという質疑があった。子どもたちがどのように考えたか、どの程度心に響いたかを知るため、話し合い活動やワークシートへ書かせるなどの作業を取り入れた。

研究協議概要

<協議の柱>

1. 提案について（良かった点・改善点を中心に）
2. 子どもの心に響いた瞬間

<協議の方法>

参加者を8グループに分け、2サイクルのワールドカフェ方式で行った。各グループ3～4人で、模造紙・付箋紙・ペンを使って協議し、最後に全体発表を行った。

<全体発表の概要>

- ・子どもたちが伸び伸びと自分の意見を発表できる雰囲気であった。これは日頃の学級経営の成果ではないか。
- ・教え込むのではなく、子どもたち同士で話し合い、道徳的価値を見出していくことが大切であるということが伝わってきた。
- ・先生が、子どもたちの様子を受け止めながら授業を振り返るという提案が、すばらしかった。
- ・3度の授業実践で、だんだんと授業の質や子どもたちの姿勢が良化しているのが分かった。
- ・子どもたちの心を響かせるには、適した発問が重要である。子どもたちにとって身近で切実なテーマを取り上げ、それに近い資料を探したり、あるいは作成したりすることで、道徳的価値を身につけさせることに近づいていくのではないか。
- ・自分たちにとって切実な内容だと子どもたちが集中する。だが、近過ぎると客観視できなくなることもあるので、教材の選び方が難しい。
- ・「道徳的葛藤」がキーワード。心に響く瞬間は、子どもたちの心が葛藤した瞬間ではないか。今回の提案は、子どもたちに葛藤があってよかった。
- ・価値の共有化を図るため、まとめをはっきりさせると良かった。
- ・道徳の授業だけで終わらせず、次に繋げることが大切である。
- ・資料を読む際に、絵があることでどの子にも分かりやすくなっていた。
- ・意見を言わない子、言えない子の気持ちをどう取り上げていくかが課題である。

まとめ概要

- ・道徳は、子どもも教師も道徳的自立を目指すべきである。そのためには高度の価値判断基準を確立させなければならない。本日の提案は、視覚に訴えたり、動作化させたりすることで、子どもたちの心に葛藤を起こさせる工夫がされていた。
- ・発表者が学び続け、学び合い、研究し続ける姿勢が評価できる。指導要領解説の「指導の基本方針」にあるとおり、教師が道徳の時間の特質を理解することが大切である。教師が説明するだけの授業ではいけない。
- ・教師の子どもたちへの影響力の強さを考えると、子どもたちの前に立つ教師の責任は大きい。子どもたちを大切に育てていただきたい。